

少子・高齢化社会と生涯学習に関する研究(3)

一正規授業の一般市民への開放「開放授業」の意義と課題一

辰 己 佳寿子
栗 原 真 美

要旨

本研究は、生涯学習を個人的な自己実現のためだけでなく、所属する社会の主体となる個人において影響を与えるものと捉え、山口大学で初めて実施した正規授業の一般市民への開放「開放授業」の意義と課題について検討する。一般の受講者へのアンケート調査（自由記述形式）から、一般市民の考える大学の開放のあり方、生涯学習の位置付け等が窺えた。

キーワード

大学開放，生涯学習，開放授業，エクステンションセンター

1. はじめに

地域は、そこに住み暮らしている地域住民や地域に関わる人々（以下「地域住民等」という。）で構成されている。また、NPO・ボランティア団体、小学校、中学校、高等学校等の教育機関、公民館、図書館、博物館等の社会教育機関、社会教育団体等の地域における各種機関、大学等の高等教育機関、企業、行政機関など様々な主体によっても構成されている。地域づくりとは、地域住民等がその他の様々な主体とともに社会の形成に主体的に参画し、互いに支えあい、協力し合うという互惠の精神に基づき、パートナーシップを形成して地域の課題を解決する活動である。それはまた、社会の問題を自分自身の問題として考える新しい「公共」の観点に立って、「自らの地域は自らつくる」という意識を持って行う主体的な活動でもある（文部科学省2004）。

これは、2004年3月、全国の地域づくりを推進するために文部科学省内に設けられた地域づくり支援アドバイザー会議の「地域を活

性化し、地域づくりを推進するために「人づくりを中心として」という提言の冒頭の言葉である。近年、中核的な学術機関として「研究」と「教育」の二つの機能を備えてきた大学が、生涯学習社会化に目を向け、“大学開放”に代表されるような「社会貢献」を大学の第3の機能として位置付ける傾向が強まっている。大学開放の具体的な例としては、①公開講座、②開放授業、③科目等履修生、④夜間部・昼夜開講制、⑤社会人特別選抜制度、⑥通信教育課程、⑦インターネット大学・大学院等が挙げられる（廣渡2006）。

大学内では、これらの具体的な取り組みをどのように実施するかということに重点が置かれている感が強い。しかしながら、このような考え方は、大学側からの見方である。「大学開放」を大学側からのみで見れば、その対象は生涯学習を通して個人的な自己実現をめざす受講者として捉えられる傾向が強くなってしまい、その評価も受講人数や受講料収入という数値的な基準に傾斜しやすい。一般的にも、生涯学習はまだまだ個人的なものという印象が強いが、個人的な自己実現のた

めだけでなく、先述した地域づくりの団体や組織等の主体とともに地域住民等が豊かな社会の形成に主体的に参画し、実践と学習を繰り返すプロセスも広い意味での生涯学習として位置づけ、社会の中の個人を視野にいれる必要があると本研究では考えている。

田中は、1978年の著書『大学拡張運動の歴史的研究』において、「開かれた大学」について、「誰に対して開くのか、本当の意味での開かれた大学とは一体どういうことなのか」と問いかけている。そして、「日本国民のひとりひとりが自然と社会と人間についての確かな科学的認識を獲得し、その認識を、生産労働を軸とする社会的諸実践に意識的に適用することを通じて、自らの物質的・精神的生活を向上させ、あるいは科学的世界観を獲得して歴史と社会の民主的発展をたたかいていく、ひとことで表現すれば、日本国民が『民衆的科学的教養』を我が物にするというすじ道を通ることによって、生活と文化と政治の主体への自己を形成していく、そのような国民の自己形成、主体形成の課題に向かって『開かれた大学』という意味であるべきだ」と述べている。つまり、1970年代の議論では、大学で学んだ知識を自分のものにするだけでなく、地域づくりを担う主体となって学習を社会へ還元する含意が込められていたのである。

いわゆる大学紛争期に主張された「開かれた大学」、中教審や臨教審等で取り上げられた生涯教育・生涯学習あるいは「生涯学習体系への移行」などの理念を経て、従来の消極的な捉え方から徐々に大学開放が大学機能のいわば第3の機能へと認識されるようになってきた。しかしながら、我が国においては、これまで、大学の基本的な機能である「研究」と「教育」に比べて、「大学開放」は大学にとって余剰的な活動であり、制度全体からも周縁的な位置づけしか与えられなかった。昨今になってようやく、第3の機能が少しず

つ定着し、先述した大学開放の具体的な取組がこぞって実施される中で、田中(1978)が発表した「開かれた大学とはなにか」という問いは決して色褪せたものではなく、現在の大学開放の本質に迫る視点なのではないかと考えられる。

以上のような問題意識から、本研究は、少子高齢化が進む山口県山口市に所在する地方総合大学の国立大学法人山口大学の開放授業の事例を通して、地域づくりの主体となる地域住民等の像を浮かび上がらせ、「開かれた大学」に関する示唆を得ることを目的としている。

2. 山口大学の開放授業

2-1 開放授業の概要

山口大学では、1979年から、地域住民(学生を含む)に対しても学習の場と機会を提供するために公開講座を開講している。2003年には、山口大学がもつ人的、知的資源の有効な活用により、地域社会との多様な連携を推進し、地域の教育・文化の推進を支援する機関としてエクステンションセンターが設立された。

2006年度からは、新しい大学の社会貢献活動の一つとして、学内で正規学生に対して開講されている授業を一般市民にも開放する「開放授業」を開始した。開放授業の開始には以下のような背景がある。いわゆる団塊の世代が60才の定年を迎えようとしている昨今、若年人口の減少とは対照的に、時間的に余裕ができ、人生をみつめ直したり、改めて学びたいと希望する人口の増加が見込まれ、生涯学習の需要はますます増大するであろう。また質的にもカルチャーセンターの学習講座には飽きたらず、よりハイレベルでアカデミックな内容が求められることになろう、というニーズの変化である。

開放授業は、地域社会における生涯学習の

表1 山口大学で実施している大学開放

	開放授業	公開講座	科目等履修生
受講資格	授業科目ごとに定めている	講座ごとに定めている	学部入学資格を準用
単位認定	無	無	有
受講料	1単位に相当する科目につき 4,500円	5時間まで4,000円 5時間を超える1時間ごとに200円追加 (シニア割引有り)	1単位に相当する授業につき 14,800円
入学料	無	無	28,200円
検定料			9,800円

一端を担うとともに、地域社会の知的啓発に資することを目的とするものであり、公開講座と目的を二にするもので、目的実現のための実施形態が異なる。期待される主な効果は以下の4点である。

- 1) 期待される大学の開放の社会的な要望に応える。
- 2) 内容的にも時間的にも、一般市民に対してより多くの生涯学習の選択肢を与える。
- 3) 少人数ではあるが異世代の人たちを受け入れることにより、教室に緊張感が生じるとともに、世代間交流も期待できる。
- 4) 受講料を徴収することにより、ささやかではあるが大学の自主財源の確保にも寄与する。

また、科目等履修生とは異なり、受講料は1単位に相当する科目につき4,500円で単位認定は行わない。この額はを公開講座受講料に準じて計算した額である。受講料決定にあたっては、開放授業を先行して実施している他大学における受講料の3,000円～10,000円程度も参考にした。開放授業、公開講座、科目等履修生の違いは、表1に示すとおりである。

開放授業の受講者は、学内売店、食堂の利用は自由である。図書館も申請により利用可能である。駐車場については利用可能であり、公開講座の受講者に対して事前に臨時駐車許可証を送付しているように同様の対応をとる

こととした。

「開放授業」という新しい制度の導入についての検討過程は以下のとおりである。まず、エクステンションセンターおよびエクステンション委員会にて2005年5月以降、その検討を進め、7月までの検討結果を「中間まとめ」としてまとめ、同月開催の幹事会において説明を行い、2006年4月からの実施に向けての了承が得られた。この結果は10月初めの部局長会議においても報告された。

検討過程において懸念されたことは、正規授業を開放することで学生の学習の妨げにならないかということであった。それに関しては、募集パンフレットにも明記し、内部用を実施要項を作成し、エクステンションセンタースタッフ間で共通認識をもつよう心掛けた(詳細は2-2の(5)参照)。

また、公開講座との差別化、山口大学本部のある山口市は人口が約19万人という小規模都市では公開講座の受講者が開放授業に移行していくのではないかと懸念もあった。

さらに、教員の負担はいかほどのものか、教員への評価・手当、受講料の額などが協議された。初年度においては、授業担当教員には受講生に対する資料準備費等の必要経費(受講生1人あたり800円)を措置し、800円以上の経費が必要な場合は、「実費」としてその差額を受講生に負担してもらうこととなった。

2-2 開放授業実施のプロセス

2001年度から開放授業のモデル的な取り組みをしている信州大学のように全ての正規授業を一般市民に開放している場合もあるが、山口大学では、試行的に始めた初年度は全教員に周知をして開講希望の意向を打診した。その結果、6つの部局から13講座、11人の教員からの申し込みがあった。2006年度に開放した授業科目一覧は表2に示すとおりである。なお、開放する授業については以下の基準を設けた。

- 1) 開放の対象とする授業は共通教育、学部専門教育のみならず大学院の授業も対象とする。ただし、実験、実習などを主とした授業や情報処理関連の演習、TOEIC 関連の授業、高校レベルの補習授業である数学入門、物理学入門等は開放の対象としない。
- 2) 開放する授業はその担当教員から開放の申し出があったものに限る。
- 3) 開放する授業科目の決定は担当教員からの申し出によるだけでなく、開設学部等の了解も得るものとする。
- 4) 1クラスへの受入数は若干名とし、10名を超えないものとする。具体的な上限は担当教員の判断により授業科目ごとに定めることとする。受講資格も授業科目ごとに定める。開放授業科目を受講することのできる者は、高等学校卒業程度以上の学力を有する者とする。ただし、大学院の開放授業科目にあつては、大学卒業程度以上の学力を有する者とする。
- 5) 開放授業の受講生が正規学生の受講の妨げにならないように配慮する。山口大学の秩序を乱し、又は受講生として

ふさわしくない言動等があった場合、受講を停止することができる。故意又は過失により本法人の施設、設備等を破損、滅失又は汚損したときは、速やかに届け出るとともに、これを原状に回復し、又はその損害を賠償しなければならない。

- 6) 授業の内容によっては傷害保険への加入を要請する(公開講座と同様)
- 7) 単位の認定は行わないが、全授業回数の2/3以上の出席があった者に修了証書を発行する。修了証書はエクステンションセンター長名とする(公開講座と同様)

受講期間中の受講者からの問い合わせ等には開講学部の学務係も応じる場合も想定されるが、開放授業科目の調査、受講者募集の広報、受講申し込みの受付、修了証書の発行事務等はエクステンションセンターが行う。業務の流れは図1に示すとおりである。

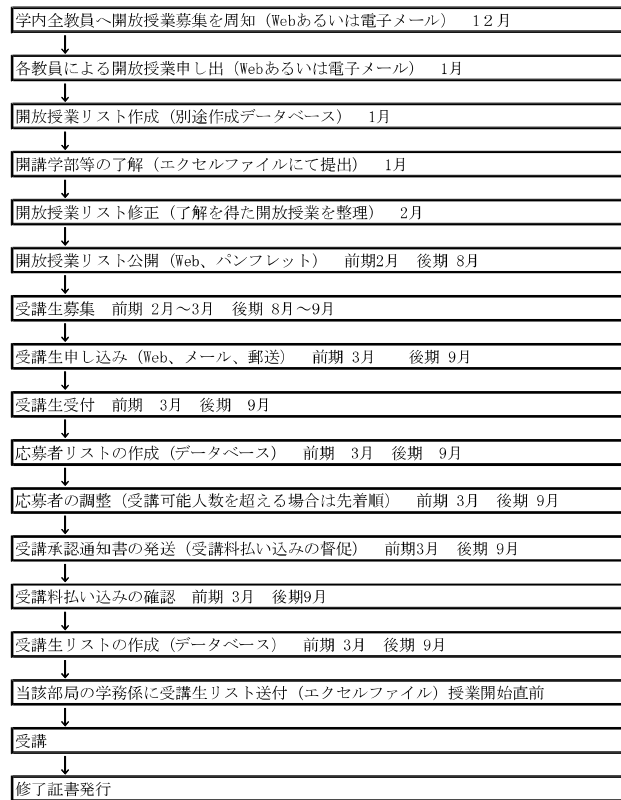


図1 開放授業の業務の流れ

表2 2006年度 開放授業 講義一覧

開講期	授業科目		定員	担当講師	講義概要	
前期	1	日本の方言	共通教育科目	10	添田 建治郎 (人文学部)	方言とは何でしょうか、その概念規定をいたします。方言の意義・方言を研究することの意義、方言形成の要因、日本の東西方言の違い、方言分布の解釈、日本各地の方言などについて述べます。
	2	生命倫理学	共通教育科目	5	谷田 憲 俊 (医学部)	生命倫理領域のトピックスを扱います。
	3	国文学概論	学部専門科目	5	吉 村 誠 (教育学部)	古事記神話を中心にその考え方や読み方を講義します。
	4	国語科教育法Ⅰ	学部専門科目	5	藤 原 マリ子 (教育学部)	明治以来の中等国語科教育の歴史を概観しつつ、今日の国語科教育が抱える課題を教育制度・教科書・教育理論等から検討してゆきます。
	5	日本財政論	学部専門科目	10	仲 間 瑞 樹 (経済学部)	日本の歳出入構造が抱える問題点、財政赤字問題、日本の税制改革の現状と今後の展望、政治と財政に関するトピックスを、毎回配布する講義ノート、資料、パワーポイントを利用しつつ説明します。
	6	国際協力論	学部専門科目	10	今 津 武 (経済学部)	グローバル化が進む中で、私たちの生活が世界中の人々とより緊密につながり、便利に豊かになってきました。一方で、世界人口の約80%は開発途上国に住み、10億人以上の人達が1日1\$以下で生活しています。この貧困をはじめ、HIV/AIDSなどの感染症、環境汚染といった地球規模の課題(Global Issues)が、私たちの生活を脅かしています。こうした問題に世界の国々はこの様に立ち向かっているのか、豊かな先進諸国と貧しい途上国の関係はどうなっているのか、日本の国際社会に対するメッセージとしての政府開発援助(ODA)とは、こうしたテーマを皆さんと一緒に考えてゆきたいと思っています。
	7	基礎園芸学	学部専門科目	5	執 行 正 義 (農学部)	園芸とは、農業における一分野で、園芸作物、すなわち、果樹、野菜、観賞植物の生産・改良・利用に関することを扱うことです。農業総生産額における園芸作物の割合は毎年30%を超え、コメ、畜産とともに日本農業の大きな柱の一つになっています。また、最近の園芸ブームや健康志向により、園芸作物に対する関心はこれまでにない高まりをみせています。しかし、一つの園芸植物を商品として市場に供給するためには、多種多様な試験・研究が必要です。したがって、園芸学は基礎から応用まで、幅広い研究分野を包括する学問として成り立っています。本講義では、園芸学的研究の中身を事例とともに少し眺めてみることにします。
後期	1	比較宗教学	学部専門科目	10	岡 村 康 夫 (教育学部)	イスラームと仏教との比較を通して「宗教とは何か」を考えます。現代世界を理解する鍵となる「宗教」の問題を、イスラームおよび仏教の基本的な歴史的・教理的知識をまとめつつ、「信仰」の問題に、歩踏み込んだ講義をします。テキストは、イスラームおよび仏教についての入門書を使います。
	2	公共政策論	学部専門科目	10	仲 間 瑞 樹 (経済学部)	なぜ政府は税金をとるのか？なぜ政府は企業の独占に厳しく対処するのか？なぜ政府は少子化対策をするのか？なぜ政府は環境保護対策をするのか？なぜ政府は景気をコントロールしようとするのか？主として上記の内容を毎回配布する講義ノート、資料、パワーポイントで説明します。
	3	経済政策総論	学部専門科目	10	塚 田 広 人 (経済学部)	今、日本と世界の経済、社会は大きく変わりつつあります。(たとえば、1990年前後の冷戦体制の終了、1980年代以降の世界の急速なボーダーレス化など。)この変化の過程で、政府の行う経済政策が大きな役割を果たしています。(たとえば政府の財政赤字の拡大傾向、公共事業への批判、郵政事業民営化、国立大学の法人化など。)これらの問題を考えるための基礎作りとして、この講義では現代経済の基礎である市場経済のしくみとその問題点を考えます。これによって、政府に求められている政策とは何かの骨格が見えてくるでしょう。テキストは、塚田広人『社会システムとしての市場経済』成文堂、1998年、を使います。
	4	簿記2	学部専門科目	10	山 下 訓 (経済学部)	日商2級程度の、企業会計の基礎及び簿記を講義します。受講には、日商3級程度の知識習得を前提としています。
	5	ミュージアムの現在と未来	共通教育科目	5	長 畑 実 (大学教育機構)	来館者数の減少、国立博物館の独立行政法人化、職員・予算の削減、閉館など厳しい状況に置かれているわが国のミュージアムの現状を分析し、未来を考察します。
	6	野菜・花卉園芸学	学部専門科目	10	執 行 正 義 (農学部)	野菜はビタミン、植物繊維、無機物等の供給源として我々の食生活に欠かすことができません。また、物の豊かさよりも心の豊かさが強く求められる現代社会において、ゆとりと安らぎを与える花は日常生活に欠かすことができないものとなってきています。本講義では、このように重要な二つの園芸分野(野菜園芸および花卉園芸)を網羅するかたちで、基礎から応用まで幅広く諸事項を解説していきます。

2-3 受講者の特徴と受講理由

新しい制度である開放授業を開放するにあたって問い合わせの多くは、「開放授業とは何なのか?」「公開講座や科目等履修生とはどう違うのか?」というものであった。また、授業の具体的な内容に関する質問や「回数が何回で、いつまでなのか」「受講資格について、自分が受けても大丈夫だろうか?」などの問い合わせや相談もあった。「開かれた大学」と銘打っても、大学の敷居は高いと考えている人々や大学の門戸を叩くのに躊躇する人々もまだまだ多く、エクステンションセンターのスタッフによる何気ない相談窓口は重要な機能を果たしている。定員枠が少ないため、後期は特に受付が殺到し、先着順で断らなければならない状況も生じた。

受講者は合計で定員105名のところ67名で充足率は63.8%であった。図2に示すとおり、平均年齢は男性64.9歳、女性54.8歳であり、50歳代、60歳代が最も多かった。なお、公開講座受講経験者が、今回、開放授業への申し込みをしている状況はみられたが、公開講座への受講申し込みについては、充足率85.2%と昨年(66.8%)を上回り、公開講座の受講者が開放授業に流れるという当初の懸念は払

拭されたといえる。

エクステンションセンターでは、受講者へのアンケートを実施するにあたって、回答を選択する形式ではなく、自由記述という形式をとった(匿名可)。数値的なデータを入手するために、細かい質問項目に設定する方法もあるが、極力、受講者の本音を聞きたいと考え、自由記述形式とした。

受講理由は、「若い頃に大学進学を断念せざるをえなかった」「興味関心を深めるため」「仕事や趣味に役立てるため」など様々であった。以下が受講者の受講理由である。

- ・当時、貧しくて大学へ行けなかった時の悲しさは今でも思い出されます
- ・45年前に大学に行きたかったのですが、引き揚げ者の両親の元では大変なことで諦めました。今この年齢になって、まさか思いを寄せた大学へ勉強が出来るチャンスをいただけると思ってもなく、すぐに希望しました。
- ・受講の理由は、今まで最も判らない分野だったから少しでも知りたいと思ったのが理由です。
- ・介護に疲れはてていた私に子供が作ってくれた時間でした。

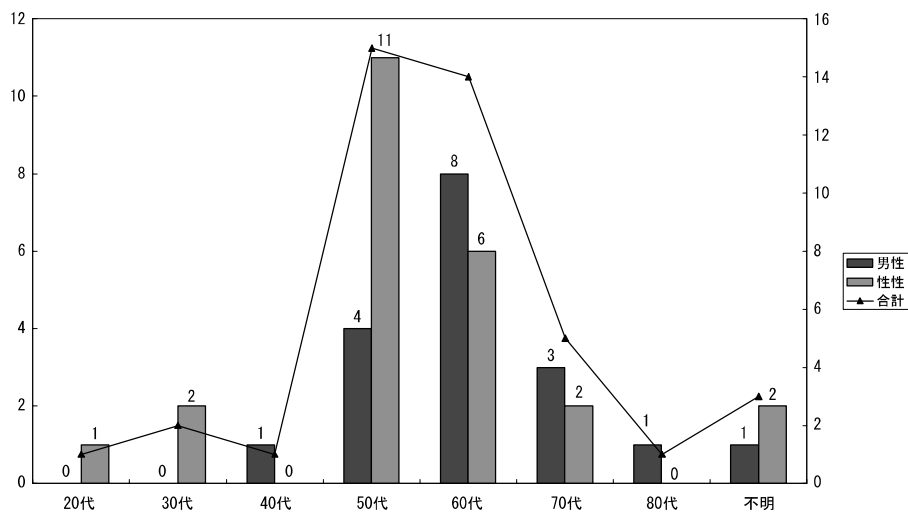


図2 受講者の年齢構成(男女別)

- ・今科学技術の進歩にともない、その知識と多様な価値観などにおいて、多くのヒューマンギャップが生じているように思います。時代に即した事象の捉え方と本当の意味での学問を知りたいと思い受講いたしました。
- ・常日頃からとても関心を持っていたのですが、知らないことが多く受講したいと思いました。
- ・日夜趣味に没頭していますが、ふと趣味を深めてみたいと思ひました。
- ・殺伐とした事件が多発している現代、生命の大切さを自分なりに見直そうと思ひ、受講をしました。
- ・貧富の差、企業収益の格差、今の日本経済は？ 誰のための政治なのか、日本はおかしい、人を考えない社会なのか、と考えさせられることが多い。その中で、あきらめではなく、自分が少しでも経済学を学び、経営上、また日本国民として政府に何を求め、個人としてどう考えていくのか等を勉強したく受講しました。

信州大学が実施した2006年度の開放授業のアンケート調査と照らし合わせてみると(表3)、回答1や回答2のような「知識や技能を身につけるため」という受講理由は山口大学でも共通していた。授業科目数が限定され

ているので、回答3の「現在の仕事に役立てるため」は少数意見であったが、回答6や回答7のように「大学の雰囲気味わう」という点では共通していた。

ただし、一人一人の意見を聞いていると、単なる知識・技能の習得や好奇心だけではなく、日本社会全体の行方や、自分自身が社会にどう関わって生きていくのかという社会と個人について問題意識をもっていることがわかる。高度経済成長期以降に誕生した世代では「日本国民として」という意識は低い傾向にあるが、戦後の復興を経験した世代においては、現代社会や将来の国家を憂えての姿勢をもっていることが窺える。受講者の期待の大きさや問題意識の高さ、そして、様々な外部要因等で長い間実現できなかった学習のチャンスをようやく掴んだという想いの大きさを感ずることが出来る

2-4 開放授業の意義

開放授業の特徴は、学生と同じ教室で同じ講義内容を十数回連続で受け、一時的に学生になることである。受講者の大半が一般市民であったり、開講時間が休暇時期や放課後に開催され、一回もしくは数回限りで終わる公開講座とは実施形態異なる。受講者からもその興奮状態が伝わってくるような声が寄せら

表3 信州大学市民開放授業のアンケート「受講理由」
質問「どのような理由で市民開放授業を受講することにしましたか？」
(複数回答)

回答1	一般教養・基礎的な知識を身につけたかった	26%
回答2	専門的な知識・技能を身につけたかった	18%
回答3	現在の仕事に役立たせたかった	6%
回答4	時間的な余裕があった	17%
回答5	経費の負担が少なかった	6%
回答6	現在の学生と同じ立場で大学の授業に参加したかった	17%
回答7	現在の学生が、どのように勉強しているか、一緒に受講して雰囲気を知りたかった	8%
回答8	その他	3%

出所) 信州大学「平成18年度前期「市民開放授業」受講生アンケート調査結果の報告」より
(<http://www.shinshu-u.ac.jp/html/shimin/h18/voice1s.html>)

れている。

- ・自分が大学に進学できなかった分、子供には大学を進めました。どんな雰囲気でも勉強していくのか、いろいろ経験させたかったです。実際にこの年齢になって大学で授業を受けられるとは夢夢考えにも及ばず、ありがたく感謝で一杯です。
- ・戦後の落ち着いた時に大学生を送りましたので、特に思い入れ深いものがあります。
- ・初回から最終講義までとても勉強になりました。毎日のニュースをテレビや新聞で見たり聞いたりしていましたが、あまりにも知らないままにいたことがわかりました。とても私には判りやすかったと思います。
- ・大変おもしろく、生き甲斐でもあります。
- ・高校卒業してよりも、今の方がずっと楽しく授業を夢中で受けられた気がします。
- ・先生が紹介して下さる本、次々と読みあさりしました。本を読む楽しさを思い出させていただきました。

< 講義内容 >

大学が生涯学習に関わっていく以上、カルチャーセンターとは違う機能を持つべきであるが、昨今、大学開放事業が各大学でこぞって進められていくにつれて、その違いが明確に理解されていないという指摘がある。大学の講座は、カルチャーセンター的な講座ではなくハイレベルでアカデミックな専門性が求められており、この要求は、特に公開講座に対するよりも開放授業に対して高いようである。

- ・日頃、チラホラと聞く話を系統的に聞けて、見聞が広まったという感じです。これが大学の専門性というのでしょうか。とても面白い楽しい授業でした。
- ・大学は単に知識を切り売りする場ではなく、

“研究”をしてその成果を“教える”場ではないでしょうか。

< 学生と共に授業を受けること >

正規の授業はあくまでも学生のために開講されている授業であるため、それを開放するにあたって懸念されたことは、学生の妨害にならないかということであった。コメントによると、一般の受講者の方が過剰に気を使っている点もみられたが、参与観察からは学生が迷惑しているような様子はなかった。むしろ、開放授業の最終講義で一般の受講者へ修了証書授与する場面では、一緒に講義を受けた正規学生が拍手で受講者の努力を拍手で讃えていた様子がうかがえた。

一般の受講者にとっては、現役の学生とともに座って講義を受けることは大変新鮮で刺激であったようである。孫や近所の若者と接する機会があったとしても、一緒に勉強する場に居合わせることは少ないので、授業の場で接することによって、「どうなる若者？」とイメージされていた悪印象が払拭されたようである。

- ・学生に混じって一般の者がいることは、先生にとってやりにくいことでしょうが・・・楽しかったです。ありがとうございました。
- ・若者の授業の妨げにならぬようしますので先生の授業、ずっとシニアのためにも続けてください。
- ・山口大学の学生さんと一緒に机を並べて同じ授業が受けられるということが嬉しいと思いました。
- ・大学卒業後30年以上になります。現役の大学生と一緒に授業を受けるのは新鮮な感覚です。
- ・学生さんはまじめで挨拶も出来る子が多いのに嬉しくなりました。まだまだ日本は捨てたものではなかったとホッとしています。

<担当教員>

開放授業は通常の講義を開放するわけだが、実際には通常通りというわけにはいかない。下記のコメントにもあるように、講義の内容を少しかみ砕いたりする準備や工夫、気を遣ったりという見えない配慮等が当然生じてくる。これまでみてきたように、問題意識が高く熱意をもった受講者が出席するのだから、授業を担当した教員からは、通常よりも緊張感をもって授業に臨んだという声も聞かれた。

その他にも、「学生と同様授業を社会人に開放することによる問題点はなかった。出席票による意見においても否定的なコメントは全くなかった。開放授業者は前方に席を取る方が多く、こうした態度が学生により影響を与える可能性があるのではないか。」という報告もされている。

- ・毎週ワクワクして通うことができました。中学、高校の授業形態と違い、先生の人柄溢れる授業で、学生との対話形式（出席票をもとに内容を・・・）がとられ、生きた授業だったと思います。
- ・出席票による質問、疑問、余談にも、先生が丁寧に調査検討してくださり、次の週にはその結果が報告してもらえました。私たちシニアが生き甲斐を感じられる授業を受けるチャンスをつくってくださったことに感謝すると共にずっと続けてほしいし、先生の大変さにも心より感謝致します。ありがとうございました。

2-5 開放授業の成果と課題

<成果と可能性>

大学の運営面からみると、公開講座と開放授業は生涯学習部門においての大学の収益事業である。開放授業は、その収益金が、担当教員への手当等を引けば、残りは大学の収益金として還元されるため、国立大学法人としては社会貢献事業の柱となるだろう。

一方、収益的な効果だけでなく、見えない波及効果も広がりつつある。自分だけの自己満足に終わるのではなく、受講者が周囲へ開放授業で学んだことを話して聞かせたり、周りの人々から「なんか変わったね」と変化を指摘されたりと、周囲へもなんらかの副次的な波及をもたらしていることがわかる。1科目の開放授業の受講によって、日本国民として何かできることが見つかったり、専門技術を習得できるわけではないが、日常生活を躍動的にするきっかけになっていると見受けられる。社会に貢献するために敢えて行動を起こさなくても、人が生きていく上では周囲の社会には必ず影響を与えているため、ひとりの受講者が、以前よりも、いきいきと生活を過ごせるようになれば、良い意味での影響力がもたらされているに違いない。本論の導入部で触れたように「誰のための大学開放か」という問いかけを考えると、大学のための大学開放ではなく、一般市民のためであり、その人たちがいきいきと社会で暮らしていくことで、巡り巡って大学にもメリットが戻ってくるという長期的な視野が重要であろう。

- ・開放授業のことを知人や子供達にも話して伝えました。このような体験をもっとたくさんの方にしていただきたいと思います。
- ・講義で日常生活の中では使用しないことを覚え、持ち帰った我が家で、話の種となり知識が増えることで、どんなにか人生が豊かになるか。ありがたく思います。
- ・学ぶことは、人生を、心を豊かにすることにつながり、嬉しいことです。
- ・いきいきした自分の人生を見直すことができました。周囲の方々からも、張り切っているとされます。

<課題>

2006年度の開放授業は山口大学にとって初年度の取組であったが、いくつかの課題も残

されている。

山口大学では数字的な把握は行っていないが、信州大学の2006年度の教員へのアンケートの結果では、開放授業を行うことに対する負担として、「多少負担に感じた」という割合が23%であった。これは信州大学だけの現象ではなく、山口大学にも該当する。

担当教員への負担を「社会貢献」の名目のもとに放置するわけにはいかず、教員への処遇が問われている。山口大学では、2006年度の実施にあたっては、教員には謝金も手当もなく、受講者一人あたり800円の資料準備費のみが支給されるだけであった。開放授業は、正規学生や一般市民問わず、授業全体の質の向上につながるが、このままボランティア的に実施するには限界がくるであろう¹。よりよい環境で開放授業を実施するためには、一般市民の受講者へのアンケートだけではなく、担当教員の声にも耳を傾ける必要がある。そして、実施環境がよくなれば担当教員の意見等を参考に、「開放してみようか、どうしようか」と決めかねている教員が、教員側の状況が分かり、「自分も開放してみようか」と考えるきっかけを作られるかもしれない。さらに、開放科目が増えれば、受講者にとって選択肢が増え、学習機会の場が増えることにつながる。

次に、正規学生への配慮である。今回は、学生の様子を把握するにあたって参与観察や若干のインタビューのみに限られたが、今後は学生の声もさらに吸収しながら、一般市民、学生、教員のニーズが合致し、関わる人々が全て何らかのメリットを得られるような仕組み作りが必要である。

最後に、事務体制の充実である。緊急時等の連絡体制も生じてくる。天気の悪化や教員の病気等の急な休講が生じた場合の連絡体制である。正規学生の場合は、学内掲示板、ネットで確認する、午前7時と11時での天気予報を基準にする等の対応がとられているが、

一般市民の中にはネットで確認する習慣のない方も多い状況ため、電話連絡が最も迅速な手段になろう。また、多くの一般市民が大学の敷居の高さ感じている現状で、大学を学ぶ場として一般市民に開放するにあたっては、まず定着した大学への堅いイメージを払拭しなければならない。その取っ掛かりが開放授業や公開講座に該当するが、受講に至るまでの様々な不安や疑問点をもつ人々も少なくはなく、特に高齢者は、パンフレットによる説明よりも、コミュニケーションによって理解をする傾向が強いので、「相談→受講」というパターンがとられる場合が多い。現時点でもできる限り親身な対応をとっているが、より充実したサービスの提供を検討する必要があるだろう。

開放授業だけに限らず、公開講座においても、生涯学習に意欲的な一般市民は、自分の考え、今まで培ったものを、言語化したい、体系化したいという思いをもち、次のステージへの欲求が高まっているのも事実である。このようなニーズにどのように対応していくのか、公開講座の実施側を手伝いをする、研究会を開催する、正規学生になるという選択肢などの様々なオプションも考慮すべき課題である。

3 おわりに

「研究」と「教育」の二つの機能を備えてきた大学は、「開かれた大学」に代表されるような「社会貢献」を第3の機能として位置付けるようになった。これはすでに世界の共通の動向になっており、大学開放の歴史は短くはないものの、国立大学法人において実際に動き出したのはここ数年である。我が国では、第3の機能が定着したとは言い難く、制度的にも周縁的な位置付けしか与えられていないことが多い。

山口大学では、この第3の機能を担う機関

として、大学教育機構の中にエクステンションセンターが設置されている。エクステンションセンターは、公開講座、開放授業、出前講義を3本柱に、大学開放・生涯学習の取組を行っているが、「生涯学習センター」「大学開放センター」という名称ではない理由は、その目指すところが、生涯学習プログラムの実施という範囲ではとどまらないからである。長畑・栗原(2005)が、大学開放を「大学の知的文化的資源の社会的開放に係る“活動総体”」と概念づけているように、エクステンション(extension)が英語で「広がる」「拡張」を意味するとおり、活動自体に注視するのではなく、何のためにそれを行うのかという問題意識をもち、それがどう社会へ波及していくのかという点をも視野に入れている。そして、その手段は他大学との競争や他大学の模倣ではなく、大学の本質と地域性を融合させたところで生じる方法論を選択していく姿勢をもつべきだ。

山口大学の理念は、「発見し、はぐくみ、かたちにする知の広場」である。つまり、キャンパスという「場」において、いろんな人が出逢い、そこで創造的な営みが生まれ展開することを意味している。新たな交友関係、仲間作りの場として、公開講座や開放授業の場を利用する受講者もいる。山口大学の開放授業はまだ始まったばかりであり、開放授業は、ほんの小さな事業ではあるが、その「場」を作り上げる第一歩として捉えられる。今後も実践と研究を継続し、大学開放が地域社会の一助となるあり方を模索していく必要がある。

(エクステンションセンター 助教授)

(エクステンションセンター /

学務部学務課 職員)

<付記>

本研究は、開放授業に受講していただいた受講者及び協力いただいた教育職員や職員のご意見で成り立っています。紙面の制約のため、お一人ずつお名前をあげることはできませんが、この場を借りてお礼を申し上げます。また、開放授業の設置においては、2代目エクステンションセンター長(2005-2006年度)である小宮克弘教授のご尽力が大きかったことを付記させていただきます。

<参考文献>

- 濱野和人, 2006, 『生涯学習 e 事典』日本生涯教育学会 (<http://ejiten.javea.or.jp/>)
- 廣渡修一, 2006, 『生涯学習 e 事典』日本生涯教育学会 (<http://ejiten.javea.or.jp/>)
- 文部科学省生涯学習政策課地域づくり支援アドバイザー会議, 2004, 『地域を活性化し、地域づくりを推進するために(提言)』 (http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/16/08/04081301.htm)
- 長畑実・栗原真美, 2005, 「山口大学公開講座の現状と課題—大学開放の視点から—」『大学教育』第2号(山口大学大学教育機構), 113-131。
- 辰巳佳寿子, 2004, 「少子・高齢化社会と生涯学習に関する研究(1)—山口大学の公開講座等に関するアンケート調査から—」『大学教育』創刊号(山口大学大学教育機構), pp.149-160。
- 田中征男, 1978, 『大学拡張運動の歴史的研究』野間教育研究所。
- 山口大学エクステンションセンター, 2003, 『山口大学地域貢献事業に関するアンケート調査報告書』。

<注>

- 1 開放授業を担当する教員へは、2006年度は、開放授業について、講師謝金(手当)を支給していないが、2007年度からは、「社会貢献奨励研究費」を支給する方向で協議を行っている。